

2017年
3月号

カトリック笹丘教会 教会 ニュース

福岡市中央区笹丘1-16-1
☎761-4504 F761-4524
広報委員会

福岡教区今年度の目標・・・「いつくしみから踏み出す第一歩」
小教区今年度のテーマ・・・「届けよう、神のいつくしみを共に」

教育は目から



主任司祭 遠山 満

先日、3月16日（木）の西日本新聞に、次のような記事がありました。「福岡都市圏の中学校で卒業式があった10日。昨年に続き、今年も派手な刺しゅう入りの特攻服姿の卒業生たちが夕刻のJR博多駅前に集結を始めた。これに対し、警戒を強めた警察官らも補導などを行い、約二時間後には事態は“沈静化”。反省した若者たちはどこかでおとなしく卒業を祝っているのかと思いきや一。中略一なんと舞台は天神のど真ん中に移っていた。午後9時、週末で賑わう警固公園。目撃者によると、特攻服姿の中学生やOBと見られる若者約100人が集結し、警察官数人では手が付けられない状況に。同じ頃、「みんな天神集会で警固公園※拡散希望」とのツイッター情報も若者の間に広まり、1時間後には私服姿を含め200人以上が溢れかえった。県警少年課の中村宗雄次席は『博多駅の警備は嚴重と察知して、若者が警固公園に流れたのではないかと。イタチごっこだった』と話す。この後、公園は封鎖されたりしたものの、逮捕者も出ることなく、若者たちは姿を消していったといいます。1年前、特攻服を着て博多駅に向かったという高1男子の話は印象的です。「ハロウィーンで大人は街中で大騒ぎするくせに何故子供は駄目なのか。卒業式後が俺らの本当の卒業式。先輩から受け継ぐ伝統ナンスよ」。

私が、この新聞記事を読んで真っ先に頭に浮かんできたことは、「教育は目から」ということです。子供たちや若者たちは、私たちを見ています。上記の事件は、一つの例にすぎませんが、子供たちや若者たちは、私たちが言う事ではなく、私たちが行う事に従います。

それでは、私たち自身は、何を見ながら、生きているのでしょうか。誰を見つめながら、自分の生涯教育を行っているのでしょうか。教育は耳からよりも目からですので、誰を模範として生きているか、何を見つめて生きているかが問題となります。言うまでもなく、私たちの最高の模範はイエス様です。ただイエス様は、現在の私たちにとって霊的な存在ですので、私たちが感受性を失っていけば、見えなくなってしまう、そんな方です。ドイツ人の臨床心理士であるクリスタ・メベスは、「派手なもの、ばか騒ぎ、肉体的快樂、センセイショナルなものに対する興味だけを追い求めることは、精神的なしみじみとした感受性を早く失わせることとなります」と言っています。

私たち大人が、自らの感受性を大切にしながら、イエス様を模範として見つめ生きていくならば、子供たちも、その姿を見て、イエス様に従う人生、永遠の命を目指す人生を歩むようになるのではないのでしょうか。

バザーをみんなで 成功させましょう！

バザースケジュール

3 / 26 (日) 食券とポスター作り 参加賞作り
ゲーム券作成

4 / 2 (日) ~食券販売、遊休品募集呼びかけ開始。
お手伝い表の貼り出しとお手伝い呼びかけ。

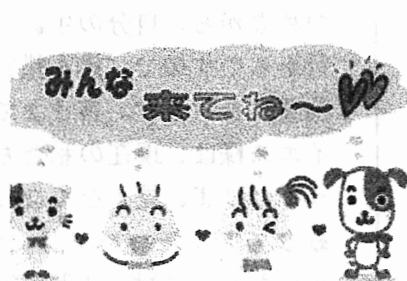
食券販売は日曜日 8 時と 10 時のミサ後 4/9 は共同回心式
後に行く。土曜日は直前の 4/29 と 5/6 のみ販売する。

5 / 10 (水) ~手芸品準備

5 / 13 (土) ~食堂準備

5 / 14 (日)

バザー



ありがとうございました 今田神父様

2017年4月1日付けで

城山教会に異動とられます



笹丘の輪と和

トマス今田昌樹

東京からこちらへ私が再び赴任したのは7年前。いよいよ10年越しの計画が実現して笹丘の建設が始まろうとする年の春のことでした。その2年前に東京に異動した時は、花のお江戸で何年生活することになるのだろう、などとぼんやり考えていましたが、神さまのご都合だったのでしょうか。思いもよらず、この笹丘に再び戻ってまいりました。5度も6度も笹丘に赴任し、ご自分をピンポン玉・送別会の神父と呼んで屈託のなかった大先輩のドワイヤ神父様には遠く及びませんが、出戻りの私を「お帰りなさい」と温かく迎えてくださった皆さんに深く感謝したことですし、その気持ちは今でも変わりません。東京に赴任する前の6年を合わせると13年、さらに32年前の懐かしい志願期、修練期を合わせれば丸15年の長きに亘り、この笹丘でお世話になりました。

助任司祭としてここに迎えていただいたからの皆さん方との関わりは、実際のところ日曜日と平日のごミサや黙想会の中でのゆるしの秘跡を通してのものを除いたら、取り立てて挙げることのできるものはこれといってなく、胸を張ってこの笹丘で頑張りました、などと言えるものではありません。こちらでの多くの時間を幼稚園、また自分の執務室で過ごした私は、皆さん方のために何ができただろうかと思うと、笑ってごまかすしかないかなという感じで、逃げ腰になってしまいます。それでも、笹丘の小教区共同体が目指す家族的な教会、地域に開かれた教会は、み言葉とご聖体という主の食卓を囲んで、共に祈り、共にいただくいのちの糧を通して培われる輪と和が土台となって育まれるものでしょう。これを思う時、そうした輪と和を築いていくために私も皆さんと共に自分の小さな役割を果たすことができたなら、これに勝る喜びはありません。

かつては若い若いと言われて、自分もその気になっていました。でも、いつの間にか還暦を過ぎ、気が付いたらグループの中で自分が一番上だったなどという、お世辞にも若いとは言えない年齢に達しながら、来し方を振り返り、自分の未熟さ、未成長ぶりにただただ不甲斐なさを覚える、そういう日々を過ごすことの多かったのがこの数年です。しかし、そんな私を温かく迎えてくださった皆さんの優しさにこの場をお借りして深く御礼申し上げると共に、笹丘教会共同体という家族の輪と和が仲良しグループの輪と和に留まることなく成長を続け、地域を巻き込んで、イエスさまの聖心の中にあるバリアフリーを一步一步実現してゆくものであるようにと、マリアさまや諸聖人の御取り次ぎを願いながら祈ります。長年に亘る皆さんのお祈りとご厚情に心から感謝しています。誠にありがとうございました。またいつの日か「ただいまー」って戻ってきたなら、どうぞこれまで同様温かくお迎えください。

心の四季チャリティーコンサート

バイオリンの
素晴らしい音色



3/5 聖堂でファミリア合唱団、太期さんのバイオリンコンサートが開かれた。



キッズファミリア



あちこちから 感動した！！の言葉が聞かれた



3.11の直前にだったので「花は咲く」は涙がでました。



信仰のルーツ



私の祖先 私を創った人々のルーツを語る

——— その2 ———

先月(2月号)から続く。前回のあらすじ

ある信者さんの自分が誕生するまでのルーツを語ります。時代は明治へと移ります。所は、北松浦郡田平。ド・ロ神父様の洗礼をうけたと思われる父方の祖父、善之助は結婚式目前で家出しました。結婚するはずだった相手は枢機卿を輩出したほどのカトリック信者一族の娘でした。

西彼杵郡外海地区に、1本の小さな川がある。川の名前は「子捨川(こすてごう)」。江戸時代外海地方を治めていた大村藩は、経済政策のために徹底した人口抑制を領民に強いた。子どもは男子は長男以外持つことを許されず、もし2人目の男子が生まれたならば、直ちに家族の手で「始末」しなければならなかった。人々は生まれたばかりの我が子を崖の上から子捨川に向かって投げた。その辛い胸のうちはいかばかりだったろう。「こすてごう」という身も蓋もない名前に、生きていくためとはいえ、我が子を殺さなければならなかった先祖達の悔恨と、決してこの罪を忘れまいと言う執念のような思いを感じずにはいられない。

外海に来たド・ロ神父は、信者達の生活を安定させるために私財を投じて機械を輸入したり、田平などの土地を購入して移住を勧めた。それは単に生活の安定のためだけではなくたのではないか。あくまで私の推測だが、おそらくド・ロ神父は信者達から昔の間引きの話を聞いたのだと思う。時代は明治になり、もう間引きをすることもなく、生まれた子どもは全て育てることができた。しかし外海は平地が少ない痩せた土地で、多くの人が生きていくのは難しい。ならば他の土地に移ればよい。そして家を継ぐのは長男と決めず、どの子どもでもよいと、神父は信者達に言った。

さて、百姓を嫌って家出した我が祖父善之助。そのことを後に身内に語った際に、ド・ロ神父の「家を継ぐのは長男でなくともよい」ということばを引き合いに出し、自分がやらかした事の言い訳にしたらしい。我が祖父ながらどこまでも身勝手な人だと、呆れて溜息しか出ない。

ちなみに善之助が引き継ぐはずだった家と嫁は、弟の幸吉にそのままスライド式に丸投げされた。(以下来月号につづく)

編集後記



母も高齢となり広い庭の維持が負担となってきて、母の家の庭を潰すことになった。今月からその工事が始まり、シンボルツリーだったモチの木が伐採され、花も木も全てなくなり、土がむき出しの更地となってしまった。その後はコンクリートで固め、中まで車が入れるように駐車場になる。

幼い頃から慣れ親しんだ庭がなくなってしまい、永遠に続くものはないのだなあと頭ではわかっているけど寂しさはどうしようもない。しかも、住宅街の数少ない広い庭の実のなる木を目当てに集まっていた鳥たちが、突然住まいをなくし、途方にくれたように地面をチョンチョンとろろついている姿に胸が痛む。

そのことを、あるプロテスタントの教会の牧師夫人に「せつないんですよええ・・・」と話したら、マタイ6・26の言葉を送ってくださった。

「あなた方の天の父は鳥を養ってくださる」

歳をとると(とらなくても?!)不安なことが多くあるけれど、うずくまってしまいそうな時もあるけれど、私たちも同じように守られているのですね。

(F.K)